

令和 6 年度

福島県 大学生の力を活用した集落復興支援事業
鮫川村真坂集落業務実施報告書

東京農業大学 SATOYAMACreators

指導教員 東京農業大学地域創成科学科地域デザイン研究室 入江彰昭

目次

第1章 はじめに	2
第2章 対象地域概要	
2-1 真坂集落について	
2-1-1 真坂集落の現状	3
2-1-2 真坂集落の年間スケジュール	4
2-2 真坂農村公園について	
2-2-1 誕生の経緯	5
2-2-2 かつての利用	6
2-2-3 現在の利用	6
第3章 今年度の活動実績報告と評価	
3-1 活動スケジュール	7
3-2 各活動内容の詳細	
3-2-1 第1,2回の活動について	7
3-2-2 第3回の活動について	8
3-2-3 第4回の活動について	9
第4章 集落の課題	10
第5章 今後の展望	10
第6章 まとめ	10

謝辞

第1章 はじめに

東京農業大学 SATOYAMA Creators と鮫川村真坂集落のよる大学生集落復興支援事業は2年目に入った。東京農業大学 SATOYAMA Creators は「文化が景観をつくり、教育で文化をつなぐ」を活動理念とし、大学生と地域住民、役場が交流、連携しながら里山資源を活かした地域づくり及び地域活性化を図ることを目的として活動をしている。里山全体をフィールドとし、地域住民との交流を通じて、地域の文化を学び、地域景観を保全し、教育を通じて文化を継承する活動を今年度も実施した。

本事業での対象地である福島県東白川郡鮫川村の真坂集落は、当団体が設立する前から地域住民の方々と交流を重ねており、人口減少や高齢化等の集落の課題を目の当たりにしていた。そこで学生が集落に入り、交流することで、学生が持つアイデアと集落の方々の希望を融合させ、鮫川村の優れた里山資源を活かした地域活性化を行うことを目指している。

昨年度は集落の中心である真坂集落農村公園の活用を推進する運びとなった。



第2章 対象地域概要

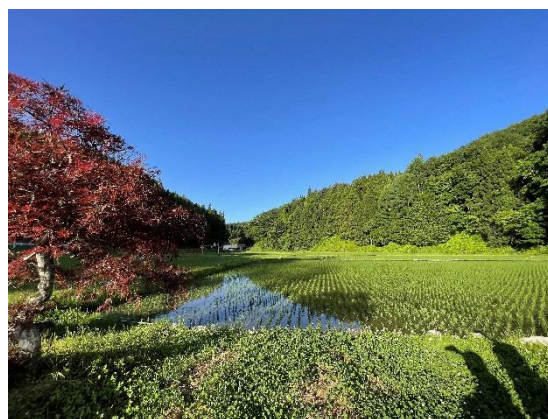
2-1 真坂集落

2-1-1 真坂集落の現状

阿武隈高原の中山間地域に位置する鮫川村には、田んぼと山林に囲まれた美しい里山景観が数多く見られる。真坂集落は村内で比較的中心地に近い、真坂農村公園を中心とした一集落である。かつては水稻や養蚕、畜産業など農業が盛んで集落が一丸となり助け合って生活してきた。地域内のつながりは今も強く、春・秋の祭礼や芋煮会、イルミネーションの飾り付け、小正月の酉小屋（どんと焼き）など多くの行事で結束力を見せている。

鮫川村全体の高齢化率が40%を超えているように、真坂集落の高齢化も例外ではない。地域の担い手が減少していくなかで、真坂農村公園の美しい景観や地域の取り組みを次の世代にどのように残していくかが、大きな課題となっている。特に景観の維持管理に関しては、夏場の草刈りや農地・公園の管理など、体力を使う外仕事が多いため、現在活動の中心となっている70代が引退すれば一層難しくなると考えられる。

そんな真坂集落に学生が入り、学生が持つアイデアと集落の方々の希望を融合し、真坂集落の中心である真坂農村公園をより集落の方々が愛着を持てる場所にすることができればと思い本事業に応募し、活動を行った。



鮫川村の風景

2-1-2 真坂集落の年間スケジュール

真坂集落の行事等の年間スケジュールは下記の表-1 のとおりである。なお、日時については多少の前後があるため、月単位での記載を基本としている。

表-1 真坂集落の行事等の年間スケジュール

日時	内容
5月3日	総会（年間スケジュール決め）
5月	さなぼり ¹⁾
7月 土用の丑の日	大掃除、草刈り、メンテナンス
9月	旗あげ（お祭） ²⁾
10月	中野地区の体育祭（現在は行っていない）
11月	芋煮会、イルミネーション設置
1月 小正月	西小屋（どんど焼き）

注釈

- 1) さなぼりとは、田植え後に田の神様を送るための祭事である。
- 2) 旗あげとは、竹に大きな旗をつけて真坂集落公民館の前に立てるといふもの。



草刈り（上段）と西小屋（下段）の様子

2-2 真坂農村公園

2-2-1 誕生の経緯

今から 30 年ほど前に田んぼの区画整備として作られた公園であり、整備には地元のゆき建設さんが関わった。公園内には、とりあげ石といわれる大きな石があり、その石を中心として公園が作られた。この石は別の場所に作られる予定であった城の石垣に使われる予定で、運ばれてきた。運ぶ途中で現在の場所に仮置されたが、いつの間にか動かせなくなってしまった。このとりあげ石には、石にお参りをすると子供を授かるといういわれがある。



真坂農村公園ととりあげ石（右下）

2-2-2 かつての利用

かつて真坂農村公園では、相撲大会や飲み会等が開催され、50～100 人ほどの人が集まることもあったが、現在では集まる機会はなくなっている。

公園内には川が流れており、その川から水を引き込み池も作られていた。川では夏に水浴びをしたり、池では鯉に餌をあげたり、冬場には凍らせてスケートをしたりしていた。このようにかつての公園は集落の方々に日常的に利用され、人が集まる場所であった。池については、上流からの土砂等によって現在は埋もれてなくなっている。

2-2-3 現在の利用

鮫川村から依頼されるかたちで、公園の管理を集落の皆さんで行っている。集落で連絡を流し草刈り等を行っている。草刈りは年に 4～5 回、23 世帯ほどの人達が集まって 1 時間半かけて行っている。23 世帯ほどとは、真坂集落の中で 4 つにグループ分けがされており、分かれたグループごとに草刈りを順番に行っている。

毎年、冬にイルミネーションを設置している。11 月下旬に設置し、1 月中旬の酉小屋行事までの期間で行っていて、集落の方々が協力して行っている。このイルミネーションは中山間地域に向けた補助金を受けたため、15 年ほど前から始めたものである。年数を重ねるごとに規模が大きくなっていき、竹で型を作ってキャラクターを作ったりもしている。

現在でも集落の方々によって管理作業が続けられているが、かつてのような日常的に利用されることがなくなってしまうている。



イルミネーションの様子

第3章 活動内容

3-1 年間スケジュール

令和5年度の本事業における活動日時と内容は下記の表-2のとおりである。

表-2 活動スケジュールと活動内容

活動日時	実態調査内容
第1回 2024年7月20日	草刈りや選定等の真坂農村公園整備
第2回 2024年10月12日	草刈りや選定等の真坂農村公園整備
第3回 2024年11月23日	真坂農村公園でのイルミネーション設置 芋煮会への参加
第4回 2025年1月11日	真坂農村公園でのイルミネーション撤去 西小屋への参加

3-2 各実態調査の詳細

3-2-1 第1、2回の活動について

1回目、2回目の活動は真坂農村公園の整備を行った。参加者は本団体員3名、学部19名、教員1名、鮫川村役場職員1名の計24名である。

真坂農村公園の整備は、集落の方々と一緒に行った。主に刈り払い機による草刈り、鎌による草刈り、低木の剪定の3つのグループに分かれ、朝6時から朝食休憩を挟み、11時半ごろまで作業を行った。雑草が広く繁茂しており作業量も多く、気温も高かったため体力を使う作業ではあったが、協力し分担しながら作業を進めることができた。

第2回目の活動は学生達が集落の方が行った草刈の後の細かいところを中心に行った。

公園内のとりあげ石周辺の柵や水辺など刈り払い機で作業を行えない場所を手作業で行い景観の整備と集落の方の手助けをすることができた。



3-2-2 第3回の活動について

3回目の活動は、2024年11月23日に真坂農村公園にてイルミネーションの設置とその後の芋煮会へ参加した。参加者は、本団体員3名、学部生19名、教員1名、鮫川村役場職員1名の計24名である。

イルミネーション設置は、集落の方々と公園内の樹木や植え込み、とりあげ石等に設置した。手が届かない高い場所は脚立や鉄パイプ等を使い設置した。イルミネーション設置では、平行して芋煮会の準備もすすめられ、男子学生はイルミネーション設置、女子学生は芋煮会の準備とそれぞれ分かれて作業を行った。その後の芋煮会では、集落の方々に公園や集落について作られた経緯からかつての利用や現在の管理に至るまで幅広くお話を伺うことができた。また学部生も多く参加し交流することができ、この活動自体が関係人口の創出に役立っていると考えられる。



イルミネーション設置作業の様子



3-2-3 第4回の活動について

今回の活動では、地域の方と一緒に、前回のイルミネーションの撤去、地域の方が伐採した竹の運搬及び酉小屋の作成、懇親会の食事の準備として餅つき・イノシシ汁を作った。

酉小屋の作成は、地域の方のご指示のもと、竹の枝払いや玉切りを行い、竹で骨組みを作った後、枝葉で壁や屋根を作成し最後に小屋に組み上げた。懇親会の準備では、白と杵を用いて地域のお母さま方から教わりながら交代で餅つきを行った。ついた餅は集落内で縫製を行っているベトナム人技能実習生の方々と一緒にきなこ餅や納豆餅にした。

酉小屋のお焚き上げでは学生も1名火入れに参加させていただき、最後には地域に方からのご要望で、学生全員でわが校の伝統である大根踊りを披露した。

集落の行事に準備段階から参加させていただく機会は大変貴重であり、一緒に作業させていただく中でより地域の方々と深く交流することができた。



第4章 集落の課題

集落の課題としては、依然として高齢化があげられる。現在の集落行事や公園整備の中心となっているのが60～70代の方々であり、今後の集落活動の維持が課題となっていくと考えられる。

昨年度の聞き取り調査から公園について集落の方々は現状の管理作業とイルミネーション、集落行事を継続していきたいということが挙げられていた。また、公園にあるとりあげ石について、お賽銭やお酒をかけると子供が授かるという言い伝えをアピールしたいということも分かった。真坂農村公園においても今後の管理等が課題となっていく中で、集落の方からも上がっているイルミネーションやとりあげ石のアピール等、集落外に向けた発信が必要であると考えられる。加えて、公園が集落の方々によって日常的に利用されるような場所となることも課題の1つであると考えられる。

第5章 今後の展望（実態調査から得られた活性化策の効果及び改善点）

昨年度の調査を経て真坂農村公園の活用推進を掲げ活動してきたが、昨年度と同様の活動となってしまったことが悔やまれる。公園を日常的に利用する場所、立ち寄りたいたいと思ってもらえる場所にするためにどうするかを考えてきたが、一番に「知らない」ということが原因であると感じた1年であった。集落の景観維持のために作業に関わらせていただいていることもあり、公園に対する思い入れは年々強くなっていると感じている。そこで、知ってもらうためには活動を続けることが重要ではないかと感じた。遠方から交流のために訪れていることを知ってもらう、活動を知ってもらうことが一番の発信になるのではないかと考える。遠方から訪れる理由は第三者からしたらとても気になる部分であると考えられる。来年度以降は集落や公園を活性化する策を交流を通じて考えながらこの活動自体を発信することを重要視して取り組んでいく。

第6章 まとめ

集落活性化事業も2年目を迎え昨年度の調査結果をもとに活動をする年ではあったが、昨年度と同様の活動となってしまった。昨年度の調査結果により集落の中心的存在である真坂農村公園の活用の幅を広げることが目的として活動はしていた。しかし、現在の真坂農村公園の景観を維持することに精一杯であること、大学と集落との物理的距離もあり、季節ごとの管理で活動が終わってしまったことが原因であると考えられる。

しかし、昨年度に比べこの活動に参加をする一般生徒が急激に増え、鮫川村に関心が大学内で広がっていることを実感することができた。集落の方々が中心となって公園を管理しているが、そこに学生が入ることで当初の狙いとは違った関係人口の創出が見えたことは良い兆しであるといえる。

今年度は交流を続けていくことの重要性を認識した年であったと思う。昨年度と同様に集落の方の日常に触れることで技術や経験を多く得ることができた。活動の結果としては

よいものではないかもしれないが交流を続けていくことが集落の景観や営みを維持していく大切な一歩であると強く感じた。交流をすること続けていくことを大事にし、来年も集落の方と一緒に歩んでいきたい。

謝辞

本事業を行うにあたり、福島県東白川郡鮫川村役場、鮫川村真坂集落の方々にはお忙しい中でも、いつも温かく学生を迎え入れていただき、活動にご協力いただき、誠にありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。また、本事業において事業を支えていただいた福島県地域振興課の皆様、社会システム株式会社の皆様には大変お世話になりました。御礼申し上げます。